徳島大学
留学生センターニュース
http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/ No.2 2004.1.20

直流から交流へ ―研究室のグローバル化を―

教育担当副学長 川上 博

本学の留学生をお世話する体制も数年前から比べると随分整ってきた。一昨年4月留学生センターが設置され、学務部に留学生課ができ、更に国際交流担当の学長補佐が置かれて留学生を含めて国際関係のお世話をいただけるようになった。私は、センター設置の要求書づくりまでお手伝いさせていただいたが、その後は補佐の先生やセンターの先生に全面的にお任せしているので現状があまり把握できていないこともあり、以下個人的に思いつく事柄を述べてみたい。

まず、学生受け入れ数は200人突破を目標にしていたが、大学院「国際環境・予防医学英語特別コース」が2002年秋開講したこともあって、つい最近この目標が達成されたと聞く。ちょうど国が20年計画で行ってきた留学生受け入れ10万人計画も本年度達成されたこともあり、今後は数よりも質の時代であるとの意見も聞かれ、本学でも質の問題を具体的に考える時期となっている。

さて、本学の留学生受け入れの特徴は何であろうか。第1に、学部留学生が極端に少なく、大多数が大学院生あるいは研究生である研究留学生であることである。平成15年5月1日現在で、ほぼ88％が研究すなわち学位取得を目的とする研究留学生なのである。これは大学院学生在籍者の約1割に当たる。また、学部留学生のかなりが大学院進学を希望することも考えると、本学の受け入れ留学生は大多数が研究者・高度専門職業人を目指すアジアの若者であると言えよう。

第2の特徴は、上記のことから滞在期間が長くなり、所属する研究室での研究生活が長期化することである。アジアからの学生は、学位取得後、直ぐに帰国するか日米の大学あるいは企業で自分たちのキャリア条件を向上させ、本国に帰って要職に付くことが期待されている。欧米からの学生では、本人の興味で特定の研究テーマの成果を求めるケースが多い。いずれにせよ大学では研究者としての役割を分担する。

したがって、留学生であることをあまり意識せずに、日本人院生と同様、自然な形で研究が遂行できるよう、研究室が運営されていることが望ましい。逆に、留学生が問題点を投げかけてくるとすれば、それは大学院生の教育研究全般にわたる問題として捉える必要がある。実際、大学院のカリキュラムの整備や担当科目のシラバスを学部並に整え、評価の高い講義をすること等は、大学院教育の課題といえる。

研究室は、日本人学生、社会人学生や留学生が、研究テーマを中心に去来し、たむろする最小単位の研究グループとなってほしい。このグループ単位での学生・研究者の交流が進めば、直流は段々交流に変わって行くであろう。現に、日本人大学院生も国際会議に出かけ留学のチャンスをつかむといった機会が増えている。

これらの特徴を総合すると、近未来の方向性がみえてくる。センター設置時に文科省に質問された「日本語・日本事情担当教員が行う業務は、外部の日本語学校等に依頼すればよいのではないか」、「200人以下の大学にも5人体制が必要か」等の回答は、すべて院生が主体の特殊性を考えると、他大学と異なる特徴を持たせることで応えられよう。来年からの中期目標・中期計画に盛られた留学生や研究者の国際・地域貢献等も研究室のグローバル化から自然に実現できると考えられる。大学院生を支える留学生センターとしての活躍を期待したい。

留学生センター長に 就任半年を過ぎて

留学生センター長
（学長補佐、歯学部教授）
市川哲雄

岸前センター長のあとを受けて昨年6月1日に留学生センター長を拝命いたしました。

私自身留学生と関わりはじめたのは最近であり、本職に就くまでは国際交流はどちらかというと消極的というか受け身でありました。しかし、留学生センターの立ち上げをはじめとして、留学生数200名を越えるまでになった徳島大学の国際交流事業は多くの人の不断と献身的なご苦労の賜であるということを思い知らされております。その一方で、係わっていない人にはそのたいへんさと重要性をなかなか理解することは難しいようで、広報活動の重要性を感じております。

みなさんにご理解いただきたいことは、国際交流は単に留学生を受け入れるということではなく、学生、研究者が相互に往来し、お互いの文化、相互の教育・研究内容を理解し、多様な価値観を受け入れ、その結果としてお互いの向上を期待しようというものです。面倒を見てやっているというのはとんでもありません。そして、将来的にはお互いの持っている能力を積極的に補完しあい、相乗的な効果、実質的な成果を得られることを期待しているわけです。

このような大学の国際化は、国際的な人材の輩出、開かれた大学の実践、国際競争力の強化、入学希望者の減少に対する対応、外部資金の導入などの法人化する大学に求められている諸問題の解決に関連した重要な事項という認識も大切だと思います。

今後とも留学生センターと国際交流にご理解、ご支援をお願いいたします。

留学生課スタッフ紹介／留学生センター教員紹介

活動報告

1 日本語研修コース

徳島大学留学生センターの第1期日本語研修コースは、タイ・バングラデシュ・メキシコ(2名)・キューバの5名で、4月14日から9月12日(約412H)まで実施され、9月12日の修了式後、5名中2名は、香川大学大学院へ、3名は徳島大学大学院へ進学しました。

開講当初は、月・水曜日は、10:25～16:05まで、火・木・金曜日は、9:00～16:05までとして授業を進めていましたが、1ヶ月が過ぎたあたりから1名の遅れが目立ってきたため、速やかに対応すべく、9:00～10:15までは補講とし、全員の授業は、1週間通して10:25～16:05までとしました。5名という人数のため、もうひとつクラスを作るのは、学習者への効果・経費・教員のやりくり等から考えて得策ではなかったため、補講を朝に持ってきて、1つのクラスで運営しましたが、結果的には遅れた学生にとっては、復習や予習の時間になり、また5人で作ってきたクラスのコミュニケーションも壊れず、よかったと思われます。

指導形態は、教員4名のチームティーチングとし、1日を1人の教員で通しました。4名中1名が担任になり、絶えず全体に目を配り、進度及び学習項目調整や試験、宿題、屋外講習、学生の健康・問題等全てにおいてリーダーとなり、他の3名は各項目ごとにディスカッション後、サポートやco-workerとしてそれぞれの役目をこなしました。

テキストは、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』とし、漢字に関しても、『みんなの日本語　漢字』を使用しましたが、後日の学習者へのアンケートの結果から、秋学期は漢字テキストとして独立したものを使用しています。

本大学のモットーである「知識にとどまらず、実際に4技能が使える」ようにするため、導入・練習・発展(会話)の中で導入と発展については、その文型・表現等の状況を重視し、慎重に臨みました。そのために、担当教員4名が絶えず連絡し合い、情報を分かち合って、学習者のあらゆる情報・状況をもとに、より具体的にアプローチしていきました。

学習の動機付けでもあり、伝わる喜びを実感する意味でも、効果的な項目については可能な限りクラスを出て、屋外講習(学内、学外での学習項目を元とした様々な活動)、ホームステイ、体験学習(阿波踊り講習会)、研修旅行(日和佐行き)とカリキュラムに盛り込みました。しかし学内の日本人学生で日本語授業をサポートしてくれるボランティアの「学生サポーター」をオリエンテーションでの学内ツアーだけでしか活用できなかったのは、秋学期の課題となりました。その反省をもとに現秋学期では、かなり活躍してくれています。

修了式では、全体の目標の一つでもあった、スピーチを各自披露しました。研修後半運用力がついてきて、意欲が出てきた頃に、県内の日和佐へ出かけ、日和佐町役場や教育委員会のご協力を得て、各年代からなる町の皆様の前でスピーチをしたことが自信となったようです。したがって修了式でのスピーチは、テーマや発表時に提示する資料等積極的に各自で決め、工夫を凝らしました。教員は、あくまでもサポートとして、必要時に指導や手助けをしました。

本コースは、スケジュールもきつく、内容もかなり盛りだくさんでしたが、学生達は、病気になる人も一人もおらず、皆元気で頑張りました。また性格的にも明るい学生達で、毎日楽しく学習できたことが、なによりもよかったと実感しております。　(大石)

2 全学日本語コース

今年度春期の全学日本語コースは、蔵本地区3 レベル4 クラス、常三島地区2 レベル2 クラスを開講しました。週1 回全12 回という限られた時間の中で、知識に偏重しない運用に結びついた日本語教育を実施するため、受講について新たに次のことを決め、実施しました。第一は、課外補講という性格から従来は自由参加という形で授業を進めていましたが、事前に教師が教案を作り、教材を作成するために学習者の情報を把握する必要があることから、受講登録期間の設定を行いました。第二に、多くの授業に参加すればそれだけ力がつくという誤解から、レベルの異なる複数のクラスに参加する学生が多かったのですが、所属するクラスを決め、各人のレベルに応じた授業を受講するようにしました。この結果、前期よりも、多くの学生に受講の機会を提供できるようになりました。今後も、開設レベル、開設クラス数、開講頻度などを検討課題とし、より留学生や外国人研究者のニーズに沿った授業を提供していきたいと考えています。

（上田）

3 地域との連携（御所小学校との連携）

御所小学校（板野郡土成町、木村佳代子校長）の「総合学習」に対する支援要請を受け、留学生6 名（韓国4 名、メキシコ2 名）の留学生とともに、平成15 年11 月15 日（土曜日）に同校を訪れました。今回の訪問は4 年生（28 名）が、「日本の遊び・世界の遊び」というテーマで学習を進める中の活動の一つとして、準備されたものです。

当日は、児童と留学生の英語による自己紹介に始まり、さらに4 つのグループに分かれて「遊び」に取り組みました。まず「メンコ」「あやとり」「福笑い」「コマ」等の日本の遊びが紹介され、それに対して留学生らも自国の遊び道具を用意、そしてルールの紹介を行いました。

特に「コマ回し」では、なかなか思うように動いてくれないコマに留学生は四苦八苦の様子でしたが、手取り足取りの指導でやっと見事に回り出した瞬間、一斉に喝采と拍手がわき起こりました。こうして日本語と英語と歓声が飛び交う中で、活発な交流がなされました。最後には、児童による英語と日本語による「秋」（文部省唱歌）の輪唱披露によって締めくくられました。

「遊び」を通して児童と留学生が交流活動を行い、それぞれにとって意義深い一日となったと思われます。センターでは今後も双方向学習の実現に向けて、協力をしていく予定です。総合学習及び異文化理解等の学習活動を考えておられる教育機関からの相談・依頼を受け付けております。

（留学生課　宮本俊明）

4 【留学説明会報告】

平成15年度は留学説明会を7月3日(木)と11月6日(木)の2回に分けて開催しました。7月3日(木)の留学説明会では、フロリダ・アトランティック大学についての説明を長篠教授(医学部保健学科)から、オークランド大学についての説明を村上教授(工学部機械工学科)から、ウェールズ大学・スウォンジー校についての説明を田村君(総合科学部4年)と安藤さん(同学部3年)にして頂きました。約30名の学生が参加してくれて、色々な情報が入手できたようです。説明して頂いた方々には厚く御礼申し上げます。

11月6日(木)の留学説明会では、武漢大学、復旦大学についての説明を荒武助教授(総合科学部)から、ウェールズ大学・スウォンジー校についての説明をサンドラさん(総合科学部和田教授の研究室に研究留学中)と田村君(総合科学部4年)にして頂きました。また、留学生課から短期留学推進制度と藤井・大塚国際交流推進資金についての説明をして頂きました。約35名の学生が参加してくれました。ご協力頂きました方々には深く御礼申し上げます。

なお、来年度から蔵本地区での留学説明会も計画しておりますので、ご期待ください♪

(坂田)

5 【留学情報】

留学に関する相談を聞いていると、「とにかく海外に行ってみたい」、「いやぁ、何となく」や「英語が話せるとカッコいいから!」という内容が多いことに驚きます。確かに海外を見聞することで色んな人と出会えますし、日本とは異なる文化を体験したり、語学力をアップしたりすることも出来るでしょう。しかし、安易な気持ちで留学を志すことは、返ってマイナスになりかねないことを知って欲しいと思います。

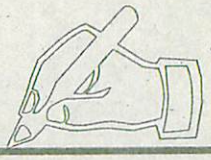
例えば、海外で生活をする時に必ず体験する「孤独や不安」について考えてみましょう。これまでに個人が日本で獲得してきた行動様式は、異文化という別世界では通用しないことも多くあります。そこから感じる「孤独や不安」に立ち向かうには、まず自分の中で「何のために留学しているのか?」、「目的を達成するためにどうすべきなのか?」という質問に対する答えを持っておくことが非常に大切です。孤独や不安に付け込む人はどこの国にもいます。日本も例外ではありません。自分なりの「芯」を事前に持っておくことは、自分の身を守る上でも非常に大切なことなのです。

基本的に「留学」は「海外旅行」ではありません。「海外旅行」は個人的バケーションとして行くものかと思いますが、「留学」は新しい知識や経験を求めて行くものです。そこには、明確な目的と計画があるのが当然であり、何の目的も無く留学を考えること自体、すでに「留学」ではないと思います。留学を考えている人には、改めて「何で留学するの?」という質問について考えて欲しいと思います。

(坂田)

私の留学体験記

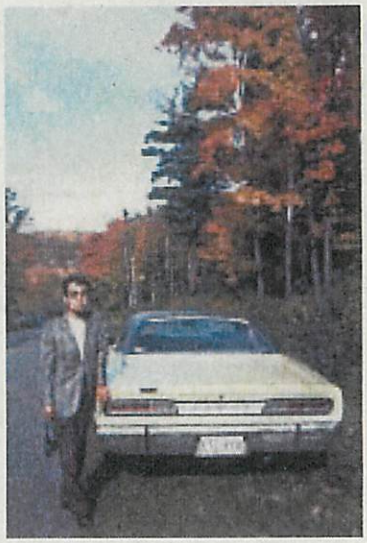
東西南北漫遊記



徳島大学医学部栄養学科栄養衛生学 教授 太田房雄

今から思えば長い放浪生活をした。初めて海外へでかけたのが、大学院生の時1969年だ。生活体験協会のグループリーダーとしてアメリカを2ヶ月くらいバスで駆けめぐった。この時に短時間であるが、オートマチックのジャガーを運転する機会があった。その後、医学部基礎教室の助手となり、カナダのオッタワで1年研究生活(ロータリー財団支援)をした。それから数年後の1976年から英国のロンドンにある王立外科大学(ロンドン大学)へ私費留学した。すでに辞表を出してロンドンでの3年目が終わる頃に当時のサンドー製薬会社より研究部長としての永久就職が内定した。運命が大きく回った。徳島大学からの要請と家庭の事情にて、1979年に帰国した。この3年の間に北欧を除くヨーロッパ諸国を車で走り回った。パリ、ジュネーブそして万年雪のアルプスを越えイタリアのポンペイまで。王立外科大学にいた間に、兄弟関係になったイタリアからの教授の招待で、その後ピサ大学へ客員教授とし1年近く、1991年には国際協力事業団の専門家として、初めてサハラ砂漠を越え、ガーナ共和国の首都アクラへ2ヶ月ほど滞在した。

この間、学会などでロシア、オーストラリア、韓国、ドイツなどへもでかけた。数年前には、上海での学会からの帰りに、中国ウイグル自治区からの留学生に招かれ、シルクロードで有名なトルファンまででかけた。さらに、教室にいた留学生の結婚式に参列するためバングラデシュへ、文部科学省の国際共同研究でベトナムへ数回、今年に入りインドの学会へ参加・発表するためにでかけた。訪問したことがない大陸と言えば、北極、南極、南アメリカと北欧であろう。併せて合計5年余りも海外にいたことになる。



中でも懐かしく、一番好きな都市はロンドンである。私が育った香川県、大学以降に過ごした徳島県、ロンドンは第三の故郷である。東京では道に迷うが、ロンドンでは地下鉄に乗ってもまず迷うことはない。あれから30年近くになるが、ロンドンでの貧乏生活のお陰で、英語で討論もでき、未だに英国英語の訛があると言われる今日である。何よりも良かったことは、ロンドンで兄弟、父親のように親しい友人ができ、イタリアからの留学生と兄弟関係になった事である。

これらの経験の中で忘れられない事の一つとして、また日本が21世紀に教育の場で国際交流・協力をどうするかを考えさせるエピソードがある。王立外科大学にいた時に、コンコルドで米国エール大学の准教授がやってきて、ある日ロンドン大学の教授と給料、研究費などで自慢話をし始めた。後者に勝ち目はない。20分くらいの負け戦の後ロンドン大学の教授が口を開いた。「英国では曾祖父さんの時から水洗トイレだ!」と。私を見やり追い打ちをかける言葉を再び発した。ゆっくりと、したり顔で。「日本も英国と同じように1000年の歴史があるよな!」と。勝負は決まり!。この意味を理解する日本人は未だにいない。

アフリカへ2ヶ月程滞在した時、カルチャーショックを経験し、帰国した時には逆カルチャーショックを受けた。文化・習慣の違いは大きい。地球上には190か国以上、その中で先進国と言われるのはわずか11か国前後、人口でもわずかである。今の日本人は何でもかんでもアメリカ指向だ。若気の至りだろうか。日本も成人になり、そろそろ老年の準備をする時ではないだろうか。いつまでも若気の至りではすまされないだろう。歴史を知り、世界に開かれた文化、教養、それに知性を養い、世界の中の徳島大学としてもらいたいと願う今日この頃である。

留学生名簿（2003/4/1～2003/9/30入学分・氏名国籍専攻教官名）

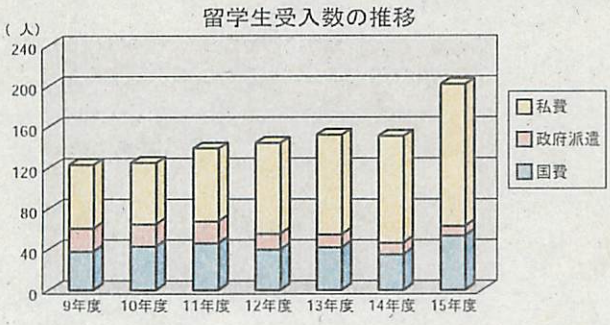
◆学部学生◆

学部研究科	氏名	国籍	指導教官
総合科学部	謝 杰 (XIE JIE)	中国	吉田(2202)
〃	魏 暁田 (WEI XIAO TIAN)	中国	山内(3709)
〃	ヤン クン (YAN KUN)	中国	石田弓(2393)
工学部	張 鴻一 (ZHANG HONG YI)	中国	山田(5313) 岡田健(4382)
〃	傅 鵬 (FU FENG)	中国	端野(4261) 中野(4222)
〃	何 峰 (HE FENG)	中国	逢坂(5214) 長町(5237)
〃	LE THI XUAN THUY	ヴィエトナム	加藤(4575)
〃	于 慧 (YU HUI)	中国	鎌野(4652)
〃	胡 暁龍 (HU XIAO LONG)	中国	野地(4932) 永澤(4907)
〃	FADHLYNA BINTI ABD WAHAB	マレイシア	野地(4932) 永澤(4907)

◆研究生等◆

学科研究科	氏名	国籍	指導教官
総合科学部	孫 峰 (SUN FENG)	中国	仙波(2214)
〃	吳 英哲 (WU YINGZHE)	中国	矢野(2605)
〃	藺 巍 (LIN WEI)	中国	岸江(2217)
〃	丁 育華 (DING YU HUA)	中国	高橋(2232)
〃	趙 建強 (ZHAO JIANG QUANG)	中国	三木(2414)
〃	林 巍 (LIN WEI)	中国	三井(2442)
〃	安 延瞻 (AN YAN LU)	中国	三木(2414)
〃	辺 国瑜 (BYI KOKU YU)	中国	伊藤(2405)
〃	米 麗萍 (MI LI PING)	中国	佐野(2351)
医学部	JERE ABHAY JAGDISH	インド	足立(2290)
工学部	李 少軍 (LI SHAO JIN)	中国	橋本(4392)
〃	金 明吉 (JIN MING JI)	中国	富田(4571)
〃	SAYED AHMAD ZIKRI BIN SAYED AL	マレイシア	森井(4717)
〃	KHAMMANIVONG SOMSAY	ラオス	伊坂(4632)
〃	邵 敏 (SHAO BIN)	中国	任(4790)
工学研究科	李 伟力 (LI EWILI)	中国	英(4401)

留学生受入数の推移



◆大学院生◆

学部研究科	氏名	国籍	指導教官
人間・自然環境研究科	向 航 (XIANG HANG)	中国	藤村(2372)
〃	孫 莉 (SUN LI)	中国	三木(2414)
〃	闫 新建 (YAN XIN JIAN)	中国	伊藤(2404)
〃	桑 婷 (SANG TING)	中国	多田(2331)
〃	米 丹 (MI DAN)	中国	三井(2442)
医学研究科	王 森 (WANG MIYAO)	中国	蛯名(2540)
〃	AZAD MD ABLKALAM	バングラデシュ	福井(2205)
〃	RAHMAN MD MUSTAFIZUR	バングラデシュ	高浜(9452)
〃	韓 宏偉 (HAN HONGWEI)	中国	松本(2565)
〃	インドリアニ INDORIANI	インドネシア	中堀(2270)
〃	MASORI MARIA	イラン	福井(2560)
歯学研究科	李 雪飛 (LI XUE FEI)	中国	細井(5210)
〃	SULTANA RAZIA	バングラデシュ	市川(5265)
〃	陳 建栄 (CHAN JIAN RONG)	中国	市川(5265)
薬学研究科	朱 冰梅 (ZHU BINGMEI)	中国	馬場(6280)
工学研究科	AZRAN AZHIM NOOR AZMI	マレイシア	木内(4641)
〃	李 相勲 (LEE SANG HUM)	韓国	村上(4383)
〃	刘 希 (LIU XI)	中国	森井(4717)
〃	殷 成久 (YIN CHENGJIU)	中国	緒方(4716)
〃	尹 大鵬 (YIN DAPENG)	中国	任(4791)
〃	許 峰 (XU FENG)	中国	北(4173)
〃	金 珍玉 (JIN ZHEN YU)	中国	任(4791)
〃	袁 飛 (YAN FEI)	中国	矢野(4712)
〃	DEENDARLIANTO	インドネシア	逢坂(5214)
〃	卢 忻 (LU XIN)	中国	大恵(4751)
〃	PHONSUE PRASIT	タイ	大恵(4751)
〃	SALAM SAYED MOUHIUDDIN ABDUS	バングラデシュ	川城(4562)
〃	李 太豪 (LI TAIGO)	中国	任(4790)
〃	鄭 燕林 (ZHENG, YAN LIN)	中国	矢野(4712)
〃	胡 海青 (HU, HAIQING)	中国	任(4791)
〃	刘 琼 (LIU QIONG)	中国	任(4790)
〃	李 哲煜 (LI ZHEYU)	中国	森井(4717)
〃	李 鑪一 (LI LU YI)	中国	矢野(4712)
〃	RAYMOND DAVID COLIN	フランス	矢野(4712)

留　学　生　課

電　話　088 －656 －7082
メール　ryugakuk@jim.tokushima-u.ac.jp

留学生センター

センター長	教　授	市川哲雄	（088）633 －7346 ichi@dent.tokushima-u.ac.jp
	教　授	大石寧子	（088）656 －9875 oishi@cue.tokushima-u.ac.jp
	教　授	三隅友子	（088）656 －7120 misumi@ias.tokushima-u.ac.jp
	教　授	金　成海	（088）656 －7543 kin@pm.tokushima-u.ac.jp
	助教授	坂田　浩	（088）656 －7199 kobayasi@ias.tokushima-u.ac.jp
	助教授	上田崇仁	（088）656 －9872 ueda@pm.tokushima-u.ac.jp

留学生の抱える問題

今回は日本語教育に関して外国人留学生特に大学院生が抱える問題について述べます。日本語能力を上げるためには充分とは言えないですが整備しつつある留学生センターが提供している全学日本語コース（日本語補講）、日本語研修コース（大学院入学前予備教育）などを利用することができます。ここで、指導教官の方から留学生に対して出来る限り日本語授業に参加するよう指導をお願いしたいところです。大学院生の場合は限られた時間内で学位を取得するため、研究、実験などが忙しく時間的に日本語の授業に参加する余裕がないという事情はあります。しかし、日本語を必要としない留学生がいる一方で、指導教官の許可が得られず日本語の授業に参加できない留学生もいます。

日本留学中には日本語を勉強せずに学位を取得し帰国してから日本語の勉強を始める人もいます。なぜかといいますと、周りの人は日本留学経験があるから日本語ができると思い込み、日本語の通訳、日本語で書いた資料の翻訳などの依頼がたくさん来るからです。このように自分の国に帰ってから日本語が要求される事もあります。

相談指導部門　金　成海
（Tel:088-656-7543, E-mail: kin@pm.tokushima-u.ac.jp）

編集後記

留学体験記を寄せていただきました。留学することで得られるものが一つでも多く、少しでも充実したものであるように、センターはどうサポートできるのか、試行錯誤の毎日です。（Ｔ）

発　行　徳島大学留学生センター
住　所　徳島市南常三島町２－１
Tel. 088-656-7082　Fax. 088-656-9873
E-mail: ryugakuk@jim.tokushima-u.ac.jp